〔3〕ステップファミリー当事者組織による支援活動の意義と課題

1．ステップファミリー当事者組織の生成と可能性

(1) ステップファミリー（再婚家族）の抱える問題と既存相談機関の対応状況

わが国においても、近年離婚率の増加とともに、ステップファミリーはその数を増やしてきていると言われる。しかし現時点では、統計的調査などによる実態は未だ不明な存在である。ひとり親家族という呼称が、社会的認知をされてきているのと比較して、ステップファミリー、再婚家族といういずれの呼称も、現時点において一般化されてきているとは言い難い状況にある。ステップファミリーの社会的認知を阻む要因のひとつに、この家族形態が、形態的には初婚・血縁家族と区別されにくいという面を持つことが挙げられよう。外見からは、そこに血のつながらない継親子関係が存在しているということは他者には伝わりにくく、結果として特別な存在として社会的に認知されることがなかった。逆に言えば、当事者が、他者に対して自分たちの状況を説明しなければ、彼らは「普通の家族」として存在することが可能でもある。しかしそのことが、結果としてステップファミリーとその家族が抱える特有の問題やニーズが、これまで顕在化されてこなかった大きな要因にもなっている。

今回の研究に先立ち、我々は2001年～2002年にかけて、わが国初の再婚家族の当事者サポート組織であるステップファミリー・アソシエーション・ジャパン（以下ＳＡＪ）の協力により、わが国初のステップファミリー当事者（継父母及び実父母）へのアンケート調査を実施した。この調査では、ステップファミリーはどのような親子関係や夫婦関係を形成しているのか、どのようなニーズを抱えているのか、専門家・専門機関からのどのようなサポートを必要としているのかなどについて明らかにしようとした。ここでは、今回の研究に先立つこのアンケート調査で明らかになったステップファミリーのサポートニーズと、専門家や相談機関への相談状況について述べた上で、当事者によるサポートグループの形成が、どのような意義を有しているのかについて探索する。

アンケート有効回答者数は113名、うち女性83名（73%）、男性30名（27%）である。調査対象となった親たちの年齢は30代が最も多く、結婚年数は2年以内が全体の7割を占め、子ども数は平均2.4人、子どもの年齢は小学校相当年代が最も多く、15歳以下の子どもが全体の8割を占めた。調査対象となったステップファミリーは、結婚後年数の比較的浅い、両親の年代が30代で子どもが学齢期にある層に集中していた。

調査では、ステップファミリーへの専門的支援の実態と求められる支援についてたずねた。まず、これまでステップファミリーが、専門家や機関からどのようなサポートを受けてきたのかについて質問した。相談項目については、「親子関係、しつけ、教育問題など子育てに関する問題」「離婚再婚など夫婦関係を中心とする問題」「親権、養子縁組、養育権問題など親子関係を中心とする法律問題」「本人の悩みなど心理的ストレスや精神的健康問題」の4領域に分け、これらの項目について専門機関に相談を受けた経験の有無についてたずねた。結果は4領域とも相談を受けた経験のある人が全体の3割を超えた。特に相談経験の有無で特徴的だったのは、性別による相談経験の差であった。男性は4領域全てにおいて相談経験ありとしたものが10%台にとどまったが、女性は4領域で、相談経験者が35～40%に達した。とりわけ「子育てに関する相談」では、4割以上の女性が相談経験有

りとしているのに対して、男性は 1 割に達しておらず、ステップファミリーにおいても、子育ての役割や責任が女性側に主にかかっている実状を反映したものと考えられる。

また調査では、専門的機関にどのような方法で相談したかについて、「直接訪問して相談」「電話による相談」「インターネットやメールなどで相談」の 3 つに分けてたずねた。結果としては、直接訪問による相談が上記の 4 領域の相談内容のいずれについてももっとも高かった。しかし一方で、電話相談よりも利用率が高かったのが、インターネット上での相談であり、相談経験者の 4 割程度の人はインターネット相談を受けていることは注目に値する。現在、専門相談機関のインターネット上での相談事業は始まったばかりであり、その総数もそれほど多くはない。そのような状況下で、例えば子どものしつけや親子関係の悩みなど子育てに関する支援についても、保健所や子育て支援センターなどの地域の相談機関に出向いたり、電話で相談することと、ほぼ同じ利用率でインターネットやメールでの相談を経験していることは、ステップファミリーの子育て相談については、身近な機関には相談しにくい現実を反映しているとも考えられる。

次に、4 領域の相談項目について、相談方法ごとに相談経験の有無を 0－4 で点数化し、性別で比較したのが、下の表である。これをみると、すべての相談方法においても女性の経験点数が有意に高いことがわかる。同じ調査において、「家庭の問題は他の人にたよらず、家族の中で解決すべきだ」という選択肢に対して、「そう思う」「ほぼそう思う」とした男性が 6 割、女性が 4 割弱となっていることからも、家庭内の問題について、ステップファミリーにおいても、外部の相談機関を利用することへの抵抗が男性に強い傾向があることが伺える。

相談方法別に見た性別による専門相談への相談件数の違い

	平均値		
	男性	女性	F 値
専門機関への相談項目数(0－4)	.46	1.56	14.23**
訪問による専門機関相談項目(0－4)	.23	.79	7.09**
電話による専門機関相談項目(0－4)	.03	.57	7.47**
インターネットによる専門機関相談項目(0－4)	.13	.48	4.01*

** p<.01 * p<.05

次に、ステップファミリーの家族類型によって、専門相談機関を利用した経験にどのような差がみられるかについて調べたのが、次の表である。これをみると、若干ではあるが、「前の結婚の子どもは配偶者のみ」という継父母に特徴的な傾向がみられた。特にこのような人たちは、訪問や電話による専門相談を受けた経験点数が他の類型に比較してやや低く、インターネット上の相談については点数が高い傾向がみられた。(ただし有意差はない)ステップファミリーでは、特に実子を持たない継父母は、直接的な訪問や電話による専門相談には抵抗があり、結果としてインターネット上の相談に向かうという状況があるのかもしれない。この調査では、具体的な専門相談機関の種類や、相談を受けたことが有効であったかといった、その効果についての質問は設けなかった。今後、さらに専門相談機関への相談ニーズや実態については、より詳細なヒアリング調査などが必要となるであろう。

相談方法別に見た家族類型別による相談件数の違い

	平均値			
	前の結婚の子は自分のみ	前の結婚の子は配偶者のみ	前の結婚の子が両方にある	F値
専門機関への相談項目数(0－4)	1.43	1.2	1.27	.45
訪問による専門機関相談項目(0－4)	.89	.39	.65	2.76
電話による専門機関相談項目(0－4)	.43	.41	.43	.04
インターネットによる専門機関相談項目(0－4)	.27	.52	.38	1.02

** p<.01　* p<.05

同じ調査において、今後必要とする専門的支援について質問した。全体として、最も必要とする支援内容については、「保育園や学校など、教育機関がステップファミリーへの理解を深めること」が最も多く、ついで「ステップファミリー専門の相談機関やカウンセリングの場などを新たなにつくること」、「児童相談所や子育て支援センターなど既存の相談機関が、ステップファミリーへの理解を深めること」の順となった。これは今回の調査対象者の多くが、１５歳以下の児童を抱えており、日常的に教育機関との関係が深く、教育機関やその専門職の理解の強化を切実に感じている結果と考えられる。性別でみると、女性の方が、カウンセリングを含めた新たな専門相談機関の創設の必要性を挙げた人が多かった。これを先にのべた実際の相談経験の有無と比較してとらえると、女性の方が既存の相談機関で実際に相談した経験から、十分な相談が既存の相談機関ではなされていないことを具体的に感じており、新たなステップファミリーについて理解があり、知識のある専門相談機関の創設を希望したとも考えられる。

（２）当事者組織生成にいたる経緯

以上の調査結果でもわかるように、現状では、ステップファミリーの悩みや相談に対して、既存の専門相談機関が十分に対応できているとはいえない。実際に、われわれのヒアリング調査では、上の子どもは実子ではなく、初めて実子を産んだ継母が、子育てについての悩みを乳幼児健診で保健士に相談したところ、「おかあさんは上のお子さんで経験しているからわかるでしょう」と言われ、何も言えなくなってしまったという経験を語っている。他にも、「子育ての経験がなく、継子の生活習慣に不満があっても、どうしつけていいかわからない」「子育ての経験がなく、継母として幸せを感じることはない」「自分を殺して、継母として母親役に徹しているので疲れる」「継子との親子関係の築き方がわからない」「既にできあがっている親子関係に入っていくとき、難しさを感じる」「実母と比較され、いつもイライラしている」などの親たちの発言から、継親子関係独特の悩みを多くの人たちが感じていることがわかる。

こういったステップファミリーの親に特徴的な悩みに対して応じられる相談機関や身近な相談相手がいなかったことを、後に自分のホームページをインターネット上に開設した

継母の一人は以下のように語っている。

「私がホームページを立ち上げるまで、本当に何もなかったですね。育児のページとかはインターネット上にもいろいろあったんですよ。でもいろいろ相談したくても、結局自分が継母だってことを言わなければ、何の話にもならないんですよ。だから実際に付き合っている人とかもそうなんですけど、我が家がステップファミリーだっていう事情を知らなければ、結局何を話しても、通じないなという思いを何度もしたんで、こりゃだめだと思って、当時友人が趣味のHPをインターネット上につくってて、そのページを見て同じようにその趣味を考えている人がいっぱい集まっているんですよ。『あ、これは使える』ってそのとき思ったんですよ。インターネットは、友達というか、知り合いを選べる媒体だなと。私以外にも絶対継母っているはずだと、そのとき思って、ちょっと自分のことを書くのはいやだったんですけど、それを書けば絶対誰かが寄ってくるという確信があったんで、始めようと思ったんです」

身近な地域で自らの特徴をオープンに話せず、孤立していたステップファミリーの親たち自身が、オンライン上でホームページを作成し、自分たちの特徴や状況をオープンにし、同じ立場の人たちとの掲示板などによる交流が始まった。こういったステップファミリーたちの個人運営のホームページが複数登場したのは、1999年ごろからであった。

次第に、社会の中で潜在化していたステップファミリー（特に継母を中心に）たちが、オンライン上で出会い、ホームページの掲示板などへの書き込みと応答のやりとり、あるいは個人的なメールの交換が活発になり、そこからいくつかのグループが生まれていった。こうした継母間の交流は、次第にオフ会などを通して、現実社会での交流へと発展していった。さらに、3、4名の継母が中心となり、継母のグループを開こうという気運が高まっていく。1999年11月には、何回かのオフ会をもとに継母たちを発起人として、会員相互では住所や氏名を交流しあい、会報などによる交流を行う継母の当事者サポート組織である「ベルメール」が誕生した。

ステップファミリー・アソシエーション・ジャパン（ＳＡＪ）が誕生したのも、ほぼ同様の時期ではあるが、この組織は先に述べたサポート組織とは多少異なる設立経緯を持っている。ＳＡＪ代表自身が再婚したのが2000年4月であり、彼女は離婚、夫は死別により双方が実子を一人ずつ連れての再婚家族となった。結婚にむけて付き合いが深まると、次第に親子関係において様々な葛藤や悩みが生まれ、専門機関の育児相談などを複数利用したが、継親子関係に関しての具体的なアドバイスを得られることはほとんどできなかった。そのような状況の中で、偶然テレビでアメリカのステップファミリーサポート組織のＳＡＡに関する番組を視聴した彼女は、インターネット上のＳＡＡのＨＰで、2000年夏にコロラドにおいて、継母当事者のサポートグループが計画するリトリートプログラムの開催案内を発見し、単身渡米し参加した。このアメリカで出会った継母たちの当事者グループとの出会いとそのアドバイスが後に、わが国初のステップファミリー当事者組織を立ち上げる　契機となり、また多くの支援となった。

（3）ステップファミリー・アソシエーション・ジャパン（ＳＡＪ）の現状

その後、どのようにＳＡＪが設立されかは、3.「対面型セルフヘルプグループ活動の実践と課題」の中で記述されているが、設立に際してＳＡＡのこれまでの当事者サポート

のプログラムの導入が図れるなど、当事者サポート組織としてＳＡＡが一つのモデルとなっていることが、大きな特徴である。他の組織と異なり、継父母、実父母といった、ステップファミリーを構成する多様な親たちがこの活動に参加していることも特徴である。2000年12月に6名の当事者により準備委員会を設立し、オンライン上に組織のＨＰを立ち上げ、ＢＢＳによる交流をスタートし、2001年6月に組織として正式に立ち上げ、会員の募集を開始した。

現在のところ、無認可団体ではあるが、運営委員会方式をとり、運営委員には9名の当事者会員（うち3組は夫婦での参加)、2名のサポート会員で構成されている。2003年3月現在で、会員数は96名（うち当事者会員85名。なお85名の中には約12組の夫婦での会員もいるので、実会員数は100名以上となる）となっている。しかし会員以外にも、各地域で実施されているセルフヘルプ活動である Leaves のみに参加している当事者、またホームページ上の BBS の交流のみに参加している潜在的な当事者も含めるとかなりの数の人たちが、このサポートグループから情報やサポートを得るようになってきている現状がある。

（4）今後の課題と展望

ステップファミリーに関する実態が未だ明らかではなく、したがって彼らの抱える支援へのニーズについても、またその対応方法についての情報の蓄積も不十分な現状において、当事者同士が自分たちが相互交流し、体験や情報を分かち合うことによって、お互いが支援しあう場を作ることは、きわめて意義のあることと思われる。もちろん当事者間の支援だけでなく、専門的支援が必要に応じて得られることも今後のステップファミリー支援にとっては必要な要件ではあるが、再婚家族という家族形態は多様な形態であり、具体的な家族による体験からの情報はきわめて重要な社会的資源となりうる。

一方で、セルフヘルプグループ活動については、どのような組織がいかに運営していくのかといった具体的な運営方法について、わが国では未だ具体的なあり方が明確となっていない。とくに、多様なメンバーで構成される再婚家族グループでは、どのようなプログラム内容でいかに活動を進めていくのかが課題となる。再婚家族研究が進み、当事者活動も一定の蓄積を経て、プログラム化が進んでいるアメリカの先進事例から学び、わが国への導入のあり方を検討しつつ、その活動をすすめているＳＡＪの当事者活動のあり方は、わが国のセルフヘルプ活動運営方法の一つの事例として、その展開過程を見守りつつ、その評価をしていく必要があるだろう。

次年度の課題としては、今年度から開始した対面型セルフヘルプグループである Leaves を各地域で展開しつつ、そのプログラム評価をさらに検討した上で、当事者ファシリテーターを要請するためのマニュアルの作成や、教育プログラムとしての終結をどのように設定するかについて明確にしていく必要性がある。

また、掲示板の交流や、Leaves の活動をとおして明らかになった、ステップファミリーの継母のもつ特有の悩みや不安へのサポートプログラムとして、新たに継母のみを対象としたオンライン上での教育プログラムや交流の実施を開始し、より対象をしぼった当事者支援活動のあり方を検討する。

（茨木尚子）

2．海外のステップファミリー支援組織の取り組み

(1) 米国最大のステップファミリー支援組織 SAA について

1997 年から、カリフォルニア州、アリゾナ州を始め 41 州で 9 月 16 日はステップファミリー・デイと定められた米国には、大小多くのステップファミリー支援組織が存在する。なかでも 1977 年に発足した Stepfamily Association of America（以下 SAA）は、他の組織に比べ SAA は、調査研究に基づく情報を発信していること、様々な分野の専門家や、大学などの機関、そして、当事者の緩やかなネットワークが形成されていることが特徴と言えるだろう。多くの研究者達と共に調査研究も進め、セラピストやソーシャルワーカーなどの専門家のためにステップファミリーについての知識を提供するセミナーの定期開催を行なったり、全米に広がるセルフヘルプ・グループの地方支部をリードし、ステップファミリー専門のセラピストを当事者に紹介、社会提言も行っている NPO である。

1959 年、後に SAA の創立者となるヴィッシャー夫妻（精神科医の夫ジョンと心理学者の妻エミリー）は、お互い 4 人ずつの子どもを連れて再婚した。2 つの異なる歴史を持つ親子が心通い合う家族になるには、心の専門家の彼らにさえ、想像を遥かに超えた多くの困難を乗り越えていく必要があった。当時は米国でもステップファミリーに対する偏見はかなり強く、専門家もまだいない状態だった。夫妻は、もしステップファミリーに対する特別な支援があったら、再婚生活の 18 年間の苦労をもっと軽くできたのではないかと考えた。

1977 年、彼らの自宅に、彼らの意見に賛同する人々が集まって、Stepfamily Association of California が発足した。夫妻は、地域でステップファミリーの仲間同士が集まり支え合う、サポートグループ・プログラムを開発し、活動を推進してゆく。また同時にステップファミリーに対するセラピーの手法や、ワークショップを編み出し、そのスキルをセラピストの人々に提供していった。これらの活動が地域のメディアの目にとまり、全米に活動が紹介されることになる。組織は必然的に全国規模となっていき、1979 年 SAA が誕生した。全国レベルの組織を作ることは大変な作業は献身的なステップファミリーの人々の手によって進められていったそうだ。

当時、ステップファミリーという言葉は、米国では、日本で言うところの継母（ままはは）や継子（ままこ）のように否定的な響きを持つ言葉であった。その他にも再婚家庭を表す言葉は、blended family（ブレンドされた家族）、extended family（拡大家族）、reconstituted family（再構成家族）などいろいろあったが、それぞれの言葉は誤解を生みやすく、また家族構成を正確に表すのは stepfamily（step=継）であることから、SAA の人たちは、再婚家庭にこの言葉を使っていくことを決め、それが少しでも肯定的に、響きのよいものになるようにという努力から始めたという。

それから、20 年以上の時を経て、今や SAA はステップファミリーの支援団体としては米国最大の組織として国内、カナダに支部を持ち、世界のステップファミリーの支援組織に向けての援助も行なっている。また設立当初はセラピストが中心だった理事会は、現在、当事者やセラピストの他に、研究者、教育関係者、牧師、宗教カウンセラー、弁護士、ビジネスコンサルタント、企業の経営者、社会政策の専門家など様々な分野の専門家によって構成される組織となっている。

（2）米国視察

① SAAのバーチャル支部「StepTogether2000」の展開

SAJ設立は、筆者が2000年4月の再婚によりステップマザー（継母）となり、継子との関係に悩んでいた時に、インターネット検索でSAAや、2000年9月に行なわれたステップマザーのためのリトリート「StepTogether2000」の開催情報を知り、渡米して参加したことがきっかけとなっている。「StepTogether2000」は、SAA関係者の組織のウェブサイトに設置されたBBS（掲示板）で交流していた3人のステップマザー（ヴァージニア州、コロラド州、カリフォルニア州在住）が発起人となり、当事者セラピストを講師に招いて開催した2泊3日のリトリートで、その後、主催グループはSAAの初のバーチャル支部となって活動を継続している。（リトリートのタイトルと支部の名前は同じ。）

2002年7月ワシントンDCにて、後述の「Smart Marriage Conference」に参加した際、SAJ設立を最も応援してくれた「StepTogether 2000」の運営スタッフの1人、クリスティン・リー・メッドに再会し、バーチャル支部のその後とステップマザーとしてのその後をインタビューすることができた。

「StepTogether2000」は2年後にフロリダ州で第2回目となるリトリート開催を計画、グループ名を「StepTogether2002」と改名した。運営スタッフも増え、組織化を図って計画を進めていたのだが、2001年9月ニューヨークで起きたテロの影響や、全米から一箇所に集まるのは参加者の金銭的負担も大きいという事情から、地方に分散してリトリートを行なうことになった。結果としてミシガン州、テキサス州、インディアナ州、ニュージャージー州、カナダ在住のステップマザーが主催の名乗りをあげ、2003年6月から7月にかけての週末に2泊3日の日程で行なわれた。開催にあたってはコーディネーターが、簡単に開催の手順をまとめたものを各主催者に送り、後の進行は地方のリーダーに任せる。セラピストを招きレクチャーを行なうもの、参加者に各自お気に入りのステップファミリーの本を持参するよう呼びかけ、当日その本について分かち合いをするというもの、主催者がレクチャーを行なうものなど、企画は多様で、自立した国民性と、ステップファミリーに関する情報量の違いを感じた。

このバーチャル支部のBBS(掲示板)について、少し触れておきたい。この支部が有するBBSは一般に閲覧は自由、書き込みに関してはハンドルネームと簡単なプロフィールの登録が必要である。登録料は無料で、登録者数は約2000名。その中に50名ほど、ステップマザーのパートナーとなる実父がいるという。また、運営スタッフの数名がSAAの会員となっているそうだ。SAAの確立された基盤がある上で、当事者の有志達が立ち上げたサポートグループが展開されている様子は大変参考になる事例である。

インタビュー時の2002年7月には、クリスティンは新しい仕事に勢力を傾けつつ、スタッフの調整役として活動をしていたが、2回目のリトリート終了後は運営側からは身を引く形で、グループを影で支える存在となっている。このスピーディかつスムーズなスタッフの交代には驚いたが、やはりこの支部はSAAという確固たる基盤の上に成り立っているということ、またバーチャルの組織であることも関係しているだろう。しかし、当事者グループが成長していく上で、スタッフの交代は重要な課題だと認識することができた。

さて、当事者としてのクリスティンにとって、リトリートやオンライン・サポートグループはどのように影響したのか。2年前出会った頃の彼女は、12歳（女）、14歳（女）、18

歳（男）の子どもを持つ男性と初婚で結婚して半年という状態だった。当時子どもは3人とも近くに住む実母の家で暮らし、クリスティンと父親の家庭を週末に訪れるという生活パターンであった。しかし、2年後には14歳の継娘は同じ生活パターンだが、20歳になる継息子は独立し、16歳の継娘は父親宅に住んで実母宅を訪問するという変化が起きている。彼女はオンライン上で、またコロラドで、「自分と同じの痛み」を持つステップマザーの仲間たちと出会い、交流できたことで、本当に癒されたという。リトリートの後も、個人的にセラピーを受け、今では自分を取り戻し、家族ともうまくいっているそうだ。

ワシントンDCでのインタビューの後、アレキサンドリアにある彼女の自宅を訪問し、彼女の夫と継娘達と夕食をとることになった。まず16歳の継娘が帰宅。米国のティーンエイジャーは日本人に比べ、精神的にも肉体的にも成熟しているとは思ってはいたが、実際会ってみて驚いた。29歳のクリスティンとは友達か、姉妹のようにしか見えない。次に夫が帰宅すると、夫であり父親である彼を巡って、クリスティンと継娘が当初ライバル関係にあったことが手に取るように解かった。その後車でレストランに向かう途中で、夫の元配偶者の家に寄り、下の娘をピックアップするという体験をした。「夫の元配偶者の家を訪れるのは、かなり抵抗があったのでは？」という質問に彼女は大きく頷き、「最初の頃はね。」と微笑んだ。その表情からは大変な時期を超えた清々しささえ感じられた。

また、ニューヨークではステップ・グランド・マザーとステップマザーの2人にインタビューすることができた。お互い子連れで再婚した友人の話の中での結婚式に実父と継父が同席していたというエピソードや、週末のみ子ども達と暮らすステップマザーの話を聞き、日本と米国では何が同じで何が違うのかを肌で感じることができたことは、米国のプログラムを扱っていく上でとても貴重な体験だったと思う。

②第6回スマートマリッジ・カンファレンス参加報告

2002年7月、ワシントンDCのクリスタルゲートウェイ・マリオットホテルで「Smart Marriage Conference」[i]が開催された。結婚に関係する団体が米国各地からトータルで1700名の参加者が集まり盛況を極めたこのイベントで、SAA主催の『Stepping Together：Smart Steps for Stepfamilies』の1日コースを受講した。「Smart Steps[ii]」というサポートグループ用のプログラムの概要を学ぶという主旨のこの講座は、受講後、大学・大学院での単位が認定され、セラピストや精神科医などステップファミリーに関する仕事をする人々にもそれぞれの需要に合わせた単位や終了証が発行される正式な講義となっている。講師は「Smart Steps」を開発した中心人物であるフランチェスカ・アドラー・ベイダー博士、アシスタントはSAAの会長、マージョリー･エンゲル博士が務めていた。

参加者は26名、うちカップル参加が3組。参加者の職業は様々で、カウンセラー、セラピスト、ソーシャルワーカー、学校の教師、米国陸軍心理学者、米国空軍のカウンセラー、看護婦、教会関係者など。参加者の殆どが何らかの形で当事者となった経験があり、仕事ではステップファミリーとは直接関係がない参加者は男性2名のみで、どちらも当事者であった。1人は再婚後まだ数ヶ月だが、自分と家族のためばかりでなく、看護婦である妻と知り合った教会でのボランティア活動に役立てばと考え参加を決めたと語り、もう1人は継子がまだ乳幼児の頃に再婚しており、父親がステップファーザーである事実をまだ知らないため、今後の関係をどう構築していくかを模索中であることが受講の動機だそうだ。

自己紹介の後、参加者に配布されたプログラムのキットについて、パワーポイントによる内容説明が始まった。このプログラムは、専門家でない一般の人が事前に専門的な知識がなくともサポートグループを主催することができるように作られている。プログラムは大人用と子ども用に分かれており、それぞれ6つのレッスン、配布用資料があり、大人用のものにはそれぞれのレッスンに対応する参考資料が添付されている。また表や図、ビデオ、『グッドナイトムーン』やその他の映画のシーンなどがふんだんに使われるなど、工夫が随所に見られるプログラムだ。また専門家にとって重要な資料になり得ると同時に、特別な知識を持たない一般の人がステップファミリーという環境に置かれた際に持ち上がる問題をどう捉え処理するかに重点が置かれている。

勿論、現在の米国のステップファミリー事情は日本と異なる部分も多い。米国では一般的に、離婚時に面接についての取り決めをし、離婚後も再婚後も子どもは2つの家庭を行き来する。その頻度や期間は、個人によって異なる。また、継親の多くは相手の子どもと養子縁組はしない。日本と違って、養子縁組を行なうと離れて暮らす実親との縁がまったく切れてしまうのである。よって米国において、継親は法律的な権利を殆ど持たないと言っても過言ではない。また、子ども達は2つの家庭を行き来することで、実の親との繋がりを保ち続けることができる一方、実親と継親との間で、板ばさみの葛藤にさらされるケースも非常に多い。大人用プログラムには、感情面でかなり共感する部分を感じるが、子ども用については、2 つの家庭を行き来することが前提で書かれているために、日本で使用するにあたっては、かなりの改訂が必要であると考えられる。

SAJ は専門家ではない当事者たちが中心となり、当事者ではない専門家の援助を受けながら活動を展開してきた。コロラドのリトリートから約2年たって訪れた米国では、組織運営面でも、プログラムの導入、開発、実践という点でも、有益な情報を多く得ることができた。SAA をモデルとして、日本に適合したステップファミリー支援組織の形を今後も模索していきたいと思う。

（笠井裕子）

【注】

[1] The Coalition for Marriage, Family and Couples Education, L.L.C. 主催 “7th Annual Smart Marriages Conference”

[ii] フランチェスカ・アドラー・ベーダー博士(Francesca Adler-Baeder, Phd. D., CFLE)が中心となって、2002年、SAA と Cornell Cooperative Extension of JeffersonCounty, NY が共同で開発したステップファミリーのためのプログラム。

【参考文献】

SAJ ハンドブック (The Handbook for Stepfamilies) 2002 SAJ
現代のエスプリ No.420 至文堂 P104-116「ステップファミリー 継母子の関係」

3．対面型セルフヘルプグループ活動の実践と課題

①LEAVESの目的と設立の経緯

①-1　LEAVESの始まり

LEAVESは、SAJの運営する「ステップファミリーの親同士が出会い、 交流し、お互いの経験からヒントを得たり、支え合うことができるサポートグループ」である。

いまや5組に1組以上が再婚[iii]という現実のなか、ほんの2年前までは、私達ステップファミリーの親達が、新たな家族を築いていくにあたり、当事者同士で『ステップファミリーの家族作り、子育て』について、経験や悩みを分かち合える場は殆ど存在しなかった。

筆者が2000年9月の米国コロラドのリトリートに参加した直後には、まだまだ「ステップファミリーの支援組織が日本にもあってほしい」という漠然としたビジョンしか持ち得なかった。社会にステップファミリーに関する理解を深めてもらいたいとか、アメリカのようにステップファミリー専門のカウンセラーがいたらよいのにとか、いろいろと希望はあり、近くの子育て支援センターや臨床心理士などにも働きかけてはみたが、関心は示されるものの、世の中はDV、虐待、ADHD、PTSD、引きこもりなど様々な問題が山積みで、ソーシャルワーカーも、カウンセラーもステップの問題だけにフォーカスできるはずもない。

そういった状況の中、同年12月、インターネットで知り合ったステップファミリーの親達と共に発足したSAJ設立準備委員会として構築したウェブサイト『Stepfamily Web』には、大きく3つの目的があった。まず、米国のものではあってもステップファミリーに関するサポート情報を提供するため、SAAの情報の翻訳やSAA関係者のメッセージを掲載すること。また委員会の設立の趣旨、ステップファミリーという言葉や現状、サポートニーズを、当事者、専門家に示すこと、そして当事者交流の場としての公開の（当事者以外にも閲覧が可能）BBS（掲示板）を設置することであった。[iv]

ステップファミリー専門のカウンセラーのセラピーを受けている300近い事例を対象とした調査研究によると[v]、

> セラピーで最も有効だったのは、①家族の状況と感情を確認し、それらがノーマルなものであると気づくこと（孤立感を軽減する）②様々な状況に関する情報、その状況を乗り切るためのサポートを得ること（無力感を軽減する）③よりよく家族の問題を解決できるために夫婦関係を強化すること④家族のひとりひとりをより理解すること⑤効果的なコミュニケーションの取り方を知ること、である

とある。日本には、ステップファミリー専門のカウンセラーがいなくても、当事者同士が、自分達の経験を分かち合い、支え合うことで、同じような効果が得られるのではないか。当事者と出会う方法はその頃はインターネットを介する他に手段はなかったため、このBBSが最初のサポートグループ活動となった。

①-2　LEAVES on Line

当初は、「ステップファミリーの人達と、経験や悩みを分かち合いたい」という気持ちだけが先走っていたが、一言でステップファミリーの大人達、親達と言っても、死別や離婚の違い、再婚か初婚か、継父、継母、実父、実母、継親と実親を兼ねているなど立場も様々であるし、家族構成も子どもの年齢、性別、人数なども家族ごとに違う。2人の間の子ど

もがいるかどうか、元配偶者と子どもの面会をしているか、元配偶者のもとで離れて暮らす子どもはいるかなど、一人一人の状況はかなり異なる。そのような様々な立場の人達に対応するために、SAA のバーチャル支部「Step Together 2000」のカテゴリー分けをされた BBS[vi]をヒントに、利用者の同質性と異質性を考慮した 4 つのフォーラムと 11 のカテゴリー[vii]を持つ BBS を設置した。

この BBS での交流の中で、現在の SAJ のスタッフが集まり、徐々にこのサポートグループはアイディンティティを確立していったとも言える。スタッフの凝集性が高まりすぎて、そうでないものを阻害するような雰囲気が出てしまったこともあるが、グループの中で共有する価値観、暗黙の同意事項をのちに公に示すための大切な時期であったと思う。BBS のルールの最後の一文に示されている「多くのステップファミリーの方が様々な体験を分かち合うことにより、時に癒され、時にヒントを得ることができ、時に違う考え方を知り、それが家族にいかされていきますように。」[viii]という一文がこのオンラインサポートグループの目的を表している。

2002 年 10 月、社会福祉・医療事業団子育て支援基金の助成事業「子連れ再婚家族の自助グループ支援活動」の一環で、このオンラインサポートグループ活動は「LEAVES on Line」と名付けられ、携帯電話にも対応、11 もあったカテゴリーもシンプルに 5 つとなった。

①-3　LEAVES@各地域

さて、BBS で分かち合いを続けていたステップファミリーの親達の中から、神奈川県、大阪府、三重県在住の 3 家族が 2001 年 7 月、愛知県に集まり交流したこと、そして、同年 11 月に SAA の会長マージョリー・エンゲル博士を日本に招聘した際に行なった SAJ 会議を経て、「次は対面で当事者同士の交流をしたい」という気持ちがスタッフの中に高まった。

対面のサポートグループ活動を始めるにあたっては、2001 年 1 月に大阪で行なわれた村本邦子先生（立命館大学特別任用教授、女性ライフサイクル研究所所長、LEAVES アドバイザー）の「ファシリテーター養成講座」に筆者と運営委員の 1 人が参加し、「LEAVES@関東」として東京で、「LEAVES@関西」として大阪で、第一回目を試験的にスタートした。

その後は前述の社会福祉・医療事業団の助成事業として、SAA のプログラムを取り入れて 3 ヶ月に一度開催することとなる。「LEAVES@各地域」は関東、関西で 5 回、九州地区で 1 回開催しているが、同時に会をリードするファシリテーターの研修や全国の他の地域で開催するためのマニュアルなどの整備を行ない、全国展開に備えて体制作りを進めている。

（笠井裕子）

②プログラムと実施内容について

②-1　プログラムの導入と開発

オンラインでのサポートグループ活動の経験しかない私達がオフラインでのサポートグループ活動となる「LEAVES@各地域」を実施するにあたっては、参加者のニーズとグループの目的を改めて統合する作業が必要であった。そのような時期にファシリテーター養成講座を受け、グループワークの知識を身につけたことは大変役に立った。知識を持って初めて、これまでの 1 年間のオンラインでの活動が「LEAVES」そのものの基盤が確立されてい

たこと、複数名のスタッフがオンライン上ではあるが、ファシリテーターとしての経験を積んできていることなどが、「LEAVES@各地域」へのスムーズな展開につながったと思う。

「LEAVES@各地域」に導入することになった「SteppingTogether[ix]」は、心理学や家族問題に関して特に専門的知識のない人にもグループワークを主催することができるように作られている。参加者用、ファシリテーター用の2冊は、連動した6章に分かれており、各章ごとにステップファミリーに関する「先入観と現実」「感情」「夫婦関係」「子どもの気持ち」「家族関係」「家庭経済」などについて学べるようになっている。各章には補足となる資料や参加者が実際に書き込みをするワークも添えられており、一方的に情報を受け取るのではなく自ら参加するという姿勢をサポートするものである。

「LEAVES@各地域」用のプログラムを開発するにあたっては、「SteppingTogether」の翻訳をもとに、法律、文化、習慣の違いなどを考慮に入れ、提供する情報の取捨選択や、実例を挙げる際日本人の生活に無理がないものに置き換えるなど、かなりの手を加える必要があった。また、米国ではステップファミリー問題に限らず、多岐に渡るテーマでこういったグループワークが盛んであるのに対し、日本では講師と受講者という形がより一般的で、グループワークに参加するのも初めてという人が多い。複数の他人の前で発言することが苦手な人も珍しくなく、自分の悩みや問題を外部に語ることに抵抗がある人もいる。このような心理的な負担を軽減するため、ワークに際しては予め回答例を用意するなどして、難しいことは要求せず、身近な問題を考えるという姿勢を徹底するようにしている。

開催頻度に関しても、SAAのグループワークは1週間に1度を奨励しており、参加者は同地域に居住し、6回のワークに連続参加するというクローズド形式に対し、「LEAVES@各地域」では、参加者の居住区が必ずしも近くないこと、開催頻度も3ヶ月に1度、そのつど申込みを受けるオープン形式をとっている。このような開催場所と開催頻度の条件の違いや、参加者にリピーターと新規参加者が交じり合う状態、また再婚前のプレステップファミリーにも対応できるよう、プログラム開発にあたっては様々な配慮をしている。

「SteppingTogether」にある情報の中には、個人を尊重し、その上で家族をまとめるという日本では馴染みの薄い考え方を基礎としているため、日本人としては俄かには受け入れ難いと思われる情報もある。しかし、ステップファミリーを円満に営んでいく上で、「個人」と「家族」のニーズのバランスを取り、家族の中の誰もが無理な我慢をしないことがとても大切であることを理解することが重要で、このプログラムはステップファミリーを考えるばかりでなく、「家族に属する自分」を再考する機会ともなっている。

②－2　実施内容

平成14年度社会福祉・医療事業団の子育て支援基金の助成事業「子連れ再婚家族自助グループ活動の支援事業」において「LEAVES@各地域」は、3ヶ月に一度、学校行事などが少ない時期の土曜日か日曜日の午後を選んで行なわれた。開催時間はトータルで2時間半。参加者はまず受付で「家族カード」[x]を記入する。グループの目的や意義、規範を参加者全員が共有するため、自己紹介の後に、「グループのルール」[xi]を一人が一段落ずつ声に出し読み上げる。

第1回目（2002年1月）はテーマは特別になく、フリートークのみ。第2回目（2002年3月）は『食べる、寝る、家族で過ごす、自分の時間…どんな工夫をしていますか？』

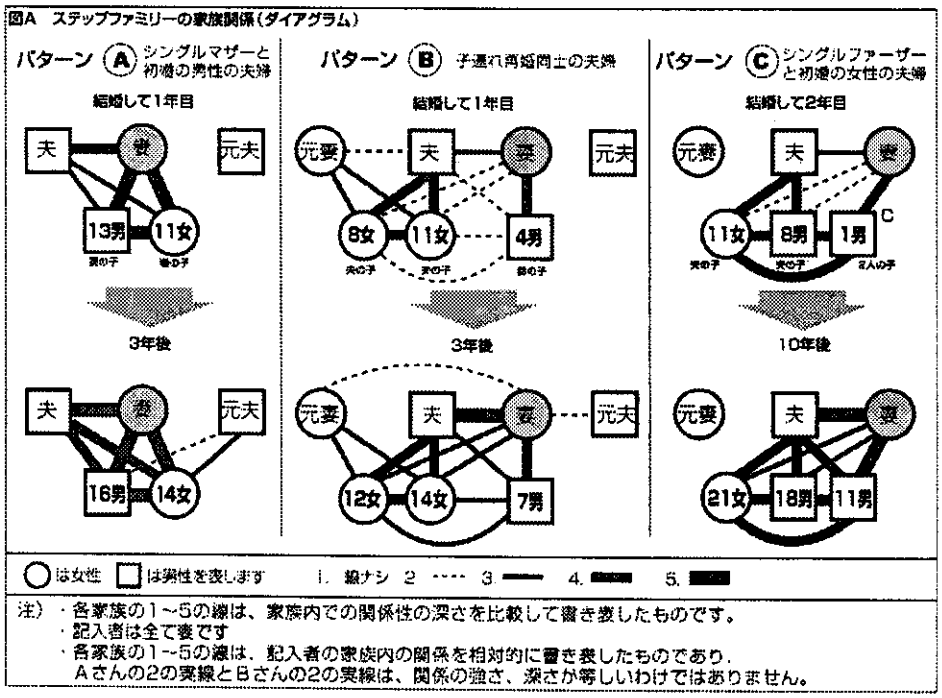
というテーマのもと、各々の家族の工夫を分かち合うフリートークを行なった。

その後 2003 年 6 月に行なわれたファシリテーターの合宿で演習を行なった際、ステップファミリーに関する有益な情報をグループのルールのように、一段落ずつ全員が交代で読み上げるという方法をとってみたところ、参加者が積極的に取り組む姿勢が生まれ、理解度が高まることは、大きな発見だった。また紙を配り、ひとりひとりが記入していけるワークを行なうのも気づきが深まる。2 日間の演習を経て、本格的な LEAVES 用プログラムの開発が始まった。

この段階で、現行のオープニングの説明 5 分、自己紹介 10 分、プログラムを使う前半の 40 分、5 分の休憩をはさんで、後半 40 分はフリートーク、最後に一人一人感想を述べてクロージング、という 2 時間半の構成が確立された。テーマは第 3 回目が『家族関係の変化』(図 A)、第 4 回目『ステップファミリーの発達段階・7 つのステップ』、第 5 回目『家族のひとりひとりの気持ちを考える』。図 A は第 3 回目に書いたダイアグラムの例だが、複雑なステップファミリーの家族ひとりひとりの関係を客観視することができ、ステップファミリーのセラピーにも有効とされているものである。

プログラムの導入によって、「LEAVES@各地域」は、当事者同士が経験や悩みを分かち合って支えあう場であると同時に、ステップファミリーに関する知識を得られる場ともなっていった。

(笠井裕子・吉本真紀)



③活動の評価

③-1　参与観察記録

第 1 回から受付として参加し LEAVES の場に同席してきたが、第 4 回 LEAVES@関西 (2002 年 11 月 10 日実施) の観察をここで紹介する。記録の方法としては、カセットや MD などの

録音機械は使わないと LEAVES のルールとして決めているということを事前に伺っていたことと、当事者しか入れない場での（筆者の入室の許可も、LEAVES の参加予約の案内に予め記載されていた）参与観察だったため、ノートに最小限に記録する形をとらせて頂いた。

参加者は、スタッフと当日欠席者 2 名を除いて 7 名、その内訳はステップカップル 1 組、プレカップル 1 組、継母歴 9 年の A さん、プレで実母 2 名、スタッフのパートナー1 名、男性 4 名女性 8 名の計 12 名である。

参加者は受付時に家族カード[xii]を作成し、それを首にかけ、円形に参加人数分前もって置かれてある椅子に、来た人から自由に着席する。ファシリテーターによる開会の挨拶後、筆者の紹介が行われ、参加者全員で「LEAVES のルール」が音読された。次に、約 1 分ずつの自己紹介をそれぞれがした後、今日のワークへと移った。今回のワークのテーマは、「ステップファミリー　7 つの発達段階[xiii]」というものである。各々がレジュメを一段落ごとに音読する。「自分達はその発達段階のどの時期にいると思うか」というファシリテーターの質問に対し、「4　変動の時期」という参加者が多い。「おおっぴらに口論できるようになった」というレジュメにある部分を取り上げている人も何人かいる。以下は、参加者の発言内容である。

・「4→5 の時期」だと思う。夫婦で口論をすると、後で自分が原因じゃないかと子どもが実親にこっそり聞きに来る。色々考えることを行動にどう移していくかが課題である。
・しつけの違いが見えてきた。例えば、食事の時にテレビを見るか、見ないかなど。
・結婚する前に家族会議をして、ルールを決めた。「こうなるのだったら家族にならない方が良かった」と子どもに思われたくないという気持ちがあって、規制緩和かもしれないが、結局ルールの低い方に合わせることになった。
・継子に対して、どこまで言っていいのかわからない。
・継子への躾は、パートナー（実父）がやっていることを見ながら必死に、追っていった。前のお母さんはどうやっていただろう？といつも思っていた。
・子ども扱いではなくて、一人の人間として見ていく。人として、していいことと悪いことの区別ができるように、と思っている。

全員での話し合いにおいては、子ども達への躾、家の中のルールに関する話題、継親と継子の関係というような話が多い。参加者の立場（ステップファミリーでの立場、継母、実父など）がかなり様々なため、「継子への躾」といっても、継母は食事や洗濯といった日常的な世話のため直接的に継子に関わることが多いが、継父は継子と殆ど会話がない中で生活していたりと継母、継父によって継子との関わり方にも随分違いがある。実父と継父の役割の違いなど興味深い話であった。

10 分ほどの休憩の後、2 グループに分かれてのフリートークである。2 グループのメンバーはスタッフによって予め分けられていた。それぞれの立場が考慮され、バランスよく構成されていた。フリートークという性質上、発言者が偏りやすいのではないかと予想したため、この様子はファシリテーターを含めた参加者が誰に向かって発言しているか、何回発言しているかに注目して観察した。ここでは、別々のグループに分かれた B さん夫妻が自分たちの経験を数々皆にシェアしながら、「参加者同士で緩やかなアドバイスをし合い、参加者が他の参加者に質問し、同じ人同士の会話に偏らず、笑いも忘れずに」というフリートークの雰囲気・場作りに、貢献されていた。ファシリテーターは、ずれていく話を「そ

うですね、私のところも～」と共感しながら、何度も自然にもとの話に戻して、充実したフリートークが行われていた。子どもにとって再婚がどうか、ということについて、「私の幸せはあなたの幸せ」とちゃんと子どもに伝えないといけない」という意見や、「勿論子どもの意見は大切だけど、子どもは逆を言うこともあるし、老後のことを考えてみても、最終決定は自分たちにあるのでは？」というような意見が出ていて、プレの参加者に対し、ステップファミリー経験者からの多くのアドバイスで盛り上がっていた。また、パートナーとカップルで参加していたプレの参加者に、「不安があって当然」「一緒に「LEAVES」に参加していることに大きな意味があるよ、大丈夫」と励ましている参加者もいた。

約30分のフリートーク後、再びひとつの円となり、今日の感想を一言ずつ参加者が述べた。「LEAVESの先輩、後輩」という言葉がある参加者の発言にあった。LEAVESも4回目となると、回を重ねるごとに複数回参加の参加者や初参加者など、参加者にもバリエーションが出てきて、その中でアドバイスし合っているのが、とても印象的であり、セルフヘルプの良さを実感した。それぞれの感想の後、ファシリテーターによる閉会の挨拶があり、参加者はアンケートを記入して、1時間半のプログラムが終了した。

多くの意見交換の行われた充実したプログラムであったが、ステップファミリーにおける立場というものを考えさせられる今回のLEAVESであった。ファシリテーターが継母の場合、他のスタッフは敢えてファシリテーターとは違う立場の「実母」にフォーカスした意見をなるべく心がけて発言するなど、の工夫がされると、よい良い交流となるのではないかと感じた。話し合いに違う立場の人の意見が聞けることも重要なことであるが、LEAVESはそれに加えて共感の場ともなることが望まれているのではないか。加えて、初参加者には特に、「自分だけじゃないんだ」という気持ちを味わえる場になることが必要である。Aさんの発言がとても多かったこと、そして「同じだと思えて、よかったです～」と帰り際とても喜んでいたこと、それに比べると（個人個人の性格によるのはもちろんであるが）実子を連れての再婚を考えているプレステップファミリーの3人の参加者は、かなり遠慮気味に参加されていたように思えたことから、このようなことを感じた。グループ分けや、ファシリテーターを決める際に、「立場」が重なることのないよう気をつけることに加え、今回のようにやむをえず重なった場合には、話の流れに偏りが出ないように、スタッフ間でしっかり事前にコミュニケーションして、LEAVESに臨むことができれば、なお良いのではないだろうか。

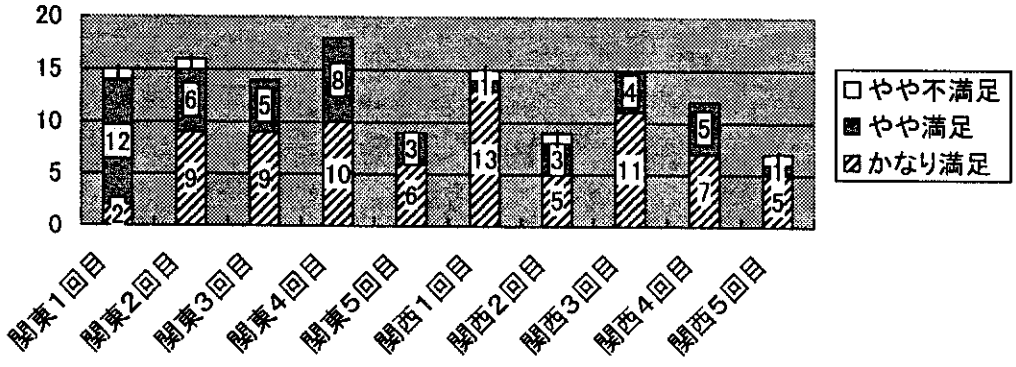
③-2　LEAVES@各地域アンケートより

各回のLEAVES終了後、参加者に無記名回答の質問紙を配布した。この節では、それらの結果より、LEAVESの実像、参加者による評価をみる。

以下のグラフは、参加者の推移とその満足度である。「かなり不満足」と答えた人は、ひとりもいなかった。「やや満足・やや不満足」と答えた人の記述式回答では、「もっと時間が長ければ」「話し足りなかった」という意見が多く、「かなり満足」と答えた人の記述では、「色々な経験談を聞くことができて、参考になった」「一人じゃないという安心感を得られ、共通項を持つ者同士の連帯感を得ることができた」という意見が寄せられた。

次回以降の参加に関して、関東のべ参加人数72名、関西のべ参加人数58名にたずねたところ、関東は「希望する」52名「都合による」20名、関西は「希望する」48名「都合

による」10名、「希望しない」と答えた人はいなかった。



「ステップファミリー生活の中で、どうすればよいのかわからないこと、悩むことはたくさんあるが、誰に相談すればいいのかわからなかった」と口にする参加者は多い。相談したとしても、「わかっていて自分が選んだのでしょう」「両親がいて子どもがいて、これ以上何が問題なのか」と理解ない言葉をかけられることを経験する人もいる。LEAVES は、誰にも相談できずにひとりで抱え込んできたステップファミリーの親たちが、同じ立場の人と出会え、本音で語り合えるという当事者同士の交流の場となっていることがわかる。

セルフヘルプグループは、自分自身と、相互という意味が組み合わさって、仲間同士が支えあうグループであると考えられる。セルフヘルプグループの特徴について久保は以下のことを挙げている。①メンバーは共通の問題を持っている、②共通のゴールがある、③対面的な相互関係がある、④メンバー同士は対等の関係にある、⑤参加は自発的なものである、⑥専門家との関係は様々であるが、基本的にはメンバーの主体性を重んじる（久保1998:86)。

LEAVES に参加することによって、同じ立場の人と出会え、本音で語り合えたこと、また他の参加者のそれぞれの経験談を聞くことで、悩んでいるのは自分だけではないという共感を得ることができ、お互いに励ましあうことができているのである。

③-3　LEAVES の意義――ファシリテーターとのフィードバックより

筆者による前掲の参与観察記録を、LEAVES でファシリテーターをこれまでに経験したスタッフに、伝え、それぞれの意見を集めた。これらの意見から、LEAVES が、「ステップファミリー」にとって、有効なサポートシステムとなっている要因を検討する。

まず、ひとつめに記録をとることについてである。輪の中でメモをとることは、それに対して違和感を持つ人もいると予想されるので[xiv]、輪の外でメモ程度にスタッフが記録をとるということ、もしくは全くメモをとらないで、LEAVES 終了後、スタッフが自分たちの記憶を出しあって内容を確認するということで、耳で聞いた時には気がつかなかったことも、視認することを通してより参加者の様子や発言に関して確認や気づきを深めることができ、より内容の濃いフィードバックをしあうことができるのではないか。黒木は、記録について「記録はメンバーのニーズや具体的事実を把握するために必要であり、またどのような具体的サービスが提供されたかを明らかにするためにも記述される。ワーカーとメンバー、あるいはメンバー同士の相互援助活動がこれによって明らかにされる。グループ

ワークの場合、メンバー自身による記録が記述されることもあるが、これがメンバーやグループ理解につながる。メンバー自身による記録はプログラム活動としても活用できる(黒木 2001:241)」と述べている。

次に、参加者のグループ分けと、ファシリテーター&コ・ファシリテーターの組み合わせについてである。同じ立場(実親同士、継親同士)の組み合わせにおいて、A さんは「(グループ分けに関して)継親と実親でくっきり分かれた時の肩透かし感(私は実親グループ)、これはもうやりたくないですね。」「(ファシリテーターの組み合わせが同じ立場同士は)気持ちよくできる関係ですが継親の心情理解にまだ乏しいところがあります。継親側でも実母の心情あたり、理解しにくくないですか?」と発言している。彼女は、参加者のグループ分け(メンバー構成)を決める立場であり、実際に分けてみて「これでいいかな?」とどぎまぎした、と発言している。それでも尚、グループが継親と実親に分かれたときには肩透かし感を感じている。

SAJ 会員の入会動機についてのアンケートにおいては、「これまで似たような立場の人が周りにいなかったため、自分だけで悩んでいた」といった、ステップファミリーとして生活しながら誰にも相談できずに孤軍奮闘してきたという回答が非常に多い。同じ立場の人達と LEAVES で出会い、自分だけではないと感じ、ステップファミリーとしての経験をシェアすると共に、共感し合うことによって孤独感から抜け出し、またステップファミリーとして経験の長い先輩の話から、自分が抱えていた問題の解決策を見出すことができたり、自分達の未来を重ねてみて勇気を得たりということは、LEAVES の利点、楽しみでもあり、SAJ が当事者同士の交流の場を提供するにあたって望んでいるサポートだろう。

「自分だけじゃない、と思うことができた」という感想を述べる一方で、LEAVES の良かった点について、「違う立場の人の意見を聞くことができた」という意見が参加者から出ることも多い[xv]。「違う立場」ということに関して、再び A さんの発言を引用するならば、「違う立場はパートナーに近い、そうも思いますし。」である。この言葉にステップファミリーにとってのセルフヘルプによるサポートが有効な理由が表されているのではないだろうか。今ステップファミリーの夫婦として自分の相方である、夫あるいは妻と同じ立場である人が LEAVES には参加しているのである。自分のパートナーと同じ立場の人から、ステップファミリー生活においての赤裸々な気持ちを聞くことができる、これは「同じ立場の人同士で共感を得る経験」以上に、貴重な体験のできる場となっているのではないだろうか。

また、LEAVES はオープンなセルフヘルプグループであるので、回を重ねるごとに、参加者の過去の参加状況にばらつきが出てくる。家族構成やステップファミリー歴といった情報という点においては、家族カードという工夫で回避できるが、ワークの理解度という点において、初参加者と既参加者との間に生まれるギャップを埋める策についても、今後検討していかなければならない。

「ワークの内容やその時の参加者の立場など、色々な状況から判断していくのはとっても難しいですね。」とは、あるスタッフの発言であるが、彼女は何度も LEAVES の中でファシリテーターを経験し、LEAVES 開催中に突然起こるアクシデントにいつも、うまく対応してきた。「本当に毎回いろんなことが起き…(笑)それらに対しての対応の難しさを、その都

度実感するわけです。」参加者の立場や発言を含めた会場全体の様子を常に察知しながら、ファシリテーターをされてきたことがよく解る文章である。

LEAVES を開催することによって、様々なパターンと出会い、実施後に今回のように意見を交わし、改善を重ねていくことは、今後の LEAVES がさらにステップファミリーにとって有益なサポートグループへと進歩していくために有効である。LEAVES で出会う様々な人たち、家族を通して、家族には決まった形がないということを実体験する場ともなっているのではないだろうか。LEAVES は、スタッフを含めた参加者それぞれが、LEAVES において他のステップファミリーと交流することによって、オリジナルな自分たちの家族関係を築いていく大きな支えとなっているといえるであろう。

（桑田道子）

④今後の展開について

2000 年の 4 月に再婚して半年後の 9 月、サポートや仲間を求め、SAA の支部が主催するステップマザーのためのリトリートに参加してから 2 年半。日本でもステップファミリーの当事者によるサポートグループ活動が、東京、大阪で定期的に行われるようになったことは、とても嬉しいことだ。

次なる課題は、開催地域拡大と、長期的な開催の継続である。

地域の拡大については、関東、関西は、複数の運営委員がいるのだが、他地域では開催したいと思う人が存在しても、他のスタッフが揃わなかったり、本人が当事者であるためにサポートニーズを持ちながら仲間を募り、会をリードしていくということは大変で、途中で話がストップしてしまうことが多かった。2003 年 2 月には、試験的に 4 月に「@九州」を福岡県春日市で開催したが、筆者と「LEAVES@関西」のスタッフが会場の段取り、プレスリリース、取材協力、会場作り、活動の説明、進行をすべて行ない、その場でスタッフを募った。参加者の満足度は高かったし、スタッフ希望の声も上がっているが、そのうちの一名は小さな子ども 5 人の子育て中であったり、あるカップルは、まだ両親に結婚を反対されている段階、残る一名はまだ再婚の予定はないシングルマザー。運営委員を含む LEAVES スタッフが出向かなければ開催できない状況だ。

4 月には、仙台でも初の「LEAVES@東北」が行なわれる予定であるが（仙台のケースは、開催者の妊娠、出産により、開催が延期された）、初回は代表である筆者がファシリテーターを務めるが、今後はやはり中心的に会をリードする責任者と、同じ地域に複数のスタッフのチームはどうしても必要である。

次に会の長期的な開催という課題について。運営委員を始め、LEAVES スタッフは、子育て、家事、家族のイベント、仕事など忙しい日常の中で、このステップファミリーのサポートグループが未来に向けて定着していくように、それぞれ最大限の力を合わせてここまでやってきた。経験を積み、リーダーの手腕は確実に上がっているが、長期的に会を継続していくには、他のリーダーの育成やスタッフの交代を視野に入れなければならない。ファシリテーターの募集と養成をどのように行なっていくかが今後の課題だ。

最後に、前述の SAJ の活動の 3 つの柱は相関関係にある。LEAVES が発展していくためにはサポート情報の更なる開発と、メディアなどを通じて社会にステップファミリーという言葉や現状、サポートニーズを知らせていくことが大きく影響していくだろう。

（笠井裕子）

【注】

[i] The Coalition for Marriage, Family and Couples Education, L.L.C. 主催 "7th Annual Smart Marriages Conference"

[ii] フランチェスカ・アドラー・ベーダー博士(Francesca Adler-Baeder, Phd.D., CFLE)が中心となって、2002年、SAAとCornell Cooperative Extension of JeffersonCounty, NYが共同で開発したステップファミリーのためのプログラム。

【参考文献】

SAJハンドブック (The Handbook for Stepfamilies) 2002 SAJ

現代のエスプリ No.420 至文堂 P104-116「ステップファミリー 継母子の関係」

【注】

[iii] 平成13年度人口動態統計によると、夫妻ともに初婚カップルが623、514組、夫初婚妻再婚カップルが51、256組（再婚の妻の前婚姻は、死別1、213人、離別50、043人)、夫再婚妻初婚カップルが64、169組（再婚の夫の前婚姻は、死別1、987人、離別62、182人)、ともに再婚カップルが61、060組（夫の前婚姻は、死別3、821人、離別57、239人、妻の前婚姻は、死別1、966人、離別59、094人）と、再婚総数の96.6%が離別後の再婚カップルである。但し、子連れ再婚かどうかは不明。

[iv] 現在のSAJの活動①サポート情報の提供②LEAVESの運営③社会提言につながる。

[v] Manual For Leaders, Marilyn and Ed Winter-Tamkin ,SAA 発行年不明

[vi] 現在"Step Together 2003"という名前のこのチャプターのBBSは、General Stepfamily Issues、Issues with Exes、Issues with Spouses or Significant Others、Issues with Step/Children, Ages 0-12、Ages 13 and Up、In-Laws, Family, Friends and Societyなどのカテゴリーに分かれている。http://www.steptogether.org/index.htm

[vii] http://hpcgi2.nifty.com/stepfamilyweb/wwwforum/wwwforum.cgi

[viii] http://www.saj-stepfamily.org/leaves/index.shtml#

[ix] ファシリテーター用 Stepping Together Leader's Manual 参加者用 Stepping Together Creating Strong Stepfamilies Emily B. and John S. Visher 1997 SAA

[x] 資料1参照。

[xi] 資料2参照。

[xii] 資料1参照。

[xiii] 「ステップファミリーの発達段階」は以下の通りである。(SAJハンドブック:31)

初期段階　新しい家族の始まり
　第1段階　夢と期待に満ちている時期
　第2段階　現実に直面し始める時期
　第3段階　はっきりと現実に気づく時期
中間段階　「家族」が見えてくる
　第4段階　変動の時期（家族内のズレや対立が噴出する）
　第5段階　行動の時期（新たな家族の共同運営が再出発する）
後期段階　ステップファミリーの結束を固める
　第6段階　関係が深まる時期(継親子関係が親密になり本物になる)
　第7段階　連帯達成の時期（自然体で家族関係が維持できる）

[xiv] 以前、SAJがLEAVES内容をテープ録音することに、とても拒否感を示した参加者がいたこと、また別の回で、ある参加者が許可を得ずに鞄の中で録音をしているという出来事があったので、それ以来、LEAVESのルールとして、録音はしない姿勢で臨んでいる。

[xv] 前節、アンケート結果参照。

【参考文献・資料】

Visher, E. & J. Visher, [1982] 1991, *How to win as a Stepfamily, 2nd ed.*, New York: Brunner/Mazel. (＝2001, 春名ひろこ監, 高橋朋子訳『ステップファミリー――幸せ

な再婚家族になるために』WAVE 出版.)
久保紘章・石川到覚編, 1998,『セルフヘルプ・グループの理論と展開——わが国の実践をふまえて』中央法規.
久保紘章・石川到覚編, 1998,『セルフヘルプ・グループの活動と実際——当事者・家族のインタビューから』中央法規.
黒木保博・横山穣・水野良也・岩間伸之, 2001,『グループワークの専門技術』中央法規.
SAJ, 2002,『The Handbook for Stepfamilies——SAJ ハンドブック』.